

社会科歴史授業における地域社会学習

— 単元「北海道の『山梨』」の場合 —

A Study on the Development of a Junior High School History Course :

— Unit Plan “Yamanashi as a place name in Hokkaido” —

服部 一秀* 齊藤 功太† 古川 明日香†
 HATTORI Kazuhide SAITO Kouta FURUKAWA Asuka
 萩原 義晃† 鈴木 彩†
 HAGIHARA Yoshiaki SUZUKI Aya

要約: 社会科の歴史授業は、社会科の基本要件に応えなければならない。それは学習者にとって社会をわかることができる授業でなければならない。そのためには学習者が既有的ものの見方考え方を社会的なものの見方考え方へ改めつつ対象に取り組むことを学習の基軸にする必要がある。本小稿では、その一つの可能性を明らかにするため、中学校歴史的分野において求められている「身近な地域の歴史」の取り扱いの場合に即して具体的な単元計画を提示する。この単元計画は、学習者が見方考え方を変形・拡大させつつ地域の歴史事象について掘り下げ、その事象とともに当時の地域社会また日本社会や国際社会の認識をうみだすことができるものである。

キーワード: 社会科 歴史授業 見方考え方 「身近な地域の歴史」 単元計画

I はじめに

社会科における歴史授業は、社会認識としての歴史認識を学習者に形成できるものでなければならない¹。仮に年代史的枠組を維持するとしても、それぞれの時代についての学習では、少なくともその時代の社会をわかることができるようにする必要がある。社会認識の教育は一教科としての社会科の基本条件であろう²。

尤も、過去の社会について単に知識を教授すればよいというわけではない。学習展開を形式上において課題解決的なものにすればよいというわけでもない。たとえ社会についての知識を教えても、たとえ学習展開を課題解決的なものにしても、一定の過程を踏んで一定の知識を受容させ、学習者の頭の中とは無関係に授業は授業として行われるのであれば、学習者が社会をわかることができるとは限らない。学習者が頭の中にもっている見方考え方を対象との取り組みにおいて社会的な見方考え方に改められるようにし、新たな見方考え方と結びついたものとして時々の社会についての認識をうみだせるようにすることが重要であろう³。

*社会科教育講座，†教育学研究科修士課程社会科教育専修

¹ 森分孝治「社会認識教育としての歴史教授を」、『社会科教育』No.284, 明治図書, 1986年6月号, 他, 参照。

² 服部一秀「地理科・歴史科・公民科から社会科への変革要件」, 日本教科教育学会『日本教科教育学会誌』第27巻第1号, 2004年, 同「政治的判断形成のための社会科地理授業」, 山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター『教育実践学研究』第13号, 2008年, 他。

³ 池野範男「新しい学力観に立つ社会の指導」, 文部省『中等教育資料』No.602, 1992年8月号, 同「社会科は何をめざすべきか」, 『社会科教育』No.377, 明治図書, 1993年5月号, 服部一秀「小学校の歴史学習の事例と指導—日本国憲法の制定と経済の復興」, 平田嘉三監修『歴史教育の理論と実践』, 現代教育社, 1996年, 他, 参照。

本小稿では、その実際の可能性を明らかにするため、中学校歴史的分野での各時代の学習において求められている「身近な地域の歴史」の取り扱いの場合に即して、具体的な単元計画を示す。それは小単元「北海道の『山梨』」である⁴。小単元「北海道の『山梨』」は、北海道の「山梨」という地名の追究を通じて、山梨県から北海道への集団移住につながった1907(明治40)年の大水害について掘り下げていき、その大水害とともに明治期の山梨県の地域社会また日本社会や国際社会の認識をうみだすものであり、山梨県内の中学校での実施を想定して作成されている。この小単元により、もの見方考え方の変形・拡大に基づいて地域の歴史事象の考察を深めることで当時の地域社会そして日本社会や国際社会について捉えられるようにできることを例示し、見方考え方の変形・拡大に基づく歴史授業を提起する。と同時に、地域史の取り扱いにおける地域社会と日本社会や国際社会の学習を提起したい⁵。学習内容・基本構成と認識づくりの学習構造について順に説明し、そのうえで単元全体の計画を提示し、その特質・意義を示すことにしよう。

II 学習内容と基本構成

小単元「北海道の『山梨』」は、年代史的枠組において歴史授業を行うとすれば、近代史の学習の一環に位置づくものである。この小単元では、1907(明治40)年に山梨県で起こった大水害の現象構造と背後構造を学ばせる。それは、自然的要因である気象や地質・地形などの関連、社会的要因である養蚕・製糸業の発展や鉄道整備の遅れなどに伴う山林の荒廃、それらの結びつきによる水害の発生・拡大という大水害の現象構造である⁶。また、山梨県の地域産業振興を目指した地域政治や養蚕・製糸業依存型の地域経済、藩体制解体後の中央集権体制下での国主導による日本経済の近代化の推進、日本と欧米工業諸国やアジア諸国の国際経済関係という大水害の背後構造である⁷。この小単元においては、そのような大水害の現象構造とともに背後構造を学ばせ、山梨県の地域社会の学習も、日本社会や国際社会の学習も、何れも目的化する。小単元「北海道の『山梨』」は、近代史の学習の一環において、学習者が明治期の多様なレベルの社会をわかること、関係づけてわかることを主要なねらいとする。

学習者が1907(明治40)年の大水害という事象を見出し、その現象構造や背後構造へと奥深く考察をすすめていくための素材として、この小単元では北海道の「山梨」という地名について取りあげる⁸。北海道の「山梨」という地名は、1907(明治40)年の大水害のため、多くの被災者が北海道の蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山の付近の数カ所へ集団で移住したことによるものである⁹。小単元「北海道の『山梨』」では「なぜ北海道に山梨というところがあるのか」を主題にし、学習者にとっては当た

⁴ 小単元「北海道の『山梨』」の着想にあたっては、山梨県立博物館シンボル展「『米キタ』『アスヤル』—明治四十年の大水害から百年—」(2007年8月21日～9月24日)、笛吹市・山梨県河川防災センター共催「明治40年大水害100年記念 第21回『川名人』笛吹講座」(2007年10月14日、於笛吹市スコレーセンター)などより多くの示唆を得た。

⁵ 原田智仁「ワールドワイドで学ぶ日本史と世界史のインターフェース(10) 身近な地域に世界の歴史を見る」、『社会科教育』No.571, 明治図書, 2007年1月号, 参照。

⁶ 養蚕・製糸業の発展と山林の荒廃の関係、山林の荒廃と水害の被害拡大の関係については、数多くの研究において明らかにされている。代表的なものとして、齋藤康彦「近・現代の歩み」、飯田文弥・秋山敬・笹本正治・齋藤康彦『山梨県の歴史』, 1999年, 山川出版社, pp.274-277, 有泉貞夫編著『山梨県の百年』, 山川出版社, 2003年, pp.121-128, など。

⁷ 当時における山梨県の養蚕・製糸業依存型の地域経済については、齋藤康彦『産業の展開と地域編成』, 多賀出版, 1998年, pp.120-124, など。

⁸ 地名を素材とする学習については、谷川彰英『地名に学ぶ 身近な歴史をみつめる授業』, 黎明書房, 1984年 などをはじめとして、多くの取り組みがすすめられてきている。山梨県教育委員会『ふるさと山梨 小学校編』, 2008年, 同『ふるさと山梨 中学校編』, 2008年 においても、山梨県内の地名について取り扱うページが設けられている。

⁹ 1907(明治40)年の大水害の被災者だけでなく1910(明治43)年の大水害の被災者も北海道へ集団移住した。大水害の被災者の北海道移住については、小畑茂雄「明治四十年の大水害被災者の北海道移住について」、『山梨県立博物館研究紀要』第2集, 2008年, 他。

り前のもののように思える地名という存在について問いを投げかけ、被災者の集団移住という意外な由来に気づかせる。当たり前と自明視するのを止め、疑問の眼で見られるようにし、追究を深めていくための態勢を整えられるようにする。さまざまな物事に社会性を読もうとする姿勢づくりも促す。

北海道の「山梨」という地名の追究を通じて、大水害の現象構造と背後構造を学べるようにするため、小单元「北海道の『山梨』」はパート1からパート4までの四つのパートから構成される。その基本展開についてまとめたものが表1である。

表1 小单元「北海道の『山梨』」の基本展開

<p>1 地名「山梨」の追究による大水害の存在確認</p> <p>なぜ北海道に山梨というところがあるのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北海道の山梨は山梨県と何か関係があるのか。 ・山梨県から多くの人たちが北海道へ移住したのはどうしてか。 	
<p>2 大水害の現象構造認識づくりによる「山梨」追究の深化</p> <p>北海道への集団移住につながったほどの大水害は大雨による自然現象にすぎないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大水害が起こったのは雨がたくさん降ったからか。 ・どうして降水量の最多地域と被害の最大地域が完全に一致しないのか。 ・明治期、山梨県において山林の管理が混乱したとはいえ、山林を荒廃させてしまったのはどうしてか。 	<p>大水害の現象構造・背後構造認識づくりによる地名「山梨」追究の深化</p>
<p>3 大水害の背後構造認識づくりによる「山梨」追究の深化</p> <p>なぜ山梨県では山林の荒廃につながるほどに養蚕・製糸業が盛んだったのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・扇状地が多いので養蚕・製糸業が盛んだったのか。 ・山梨県の養蚕・製糸業が自然条件を活かしつつ急速に発展したのは、どうしてか。 ・養蚕・製糸業が山梨県だけで発展したわけではないのはどうしてか。 ・養蚕・製糸業が大きく発展するほどに生糸が売れたのはどうしてか。 	
<p>4 地名「山梨」の追究のまとめと新たな追究の準備</p> <p>なぜ北海道に山梨というところがあるのか。 →この学習を通して新たにうまれた疑問はあるか。</p>	

パート1は、「なぜ北海道に山梨というところがあるのか」の追究を開始するパートである。導入にあたるパート1では、北海道豊浦町の山梨小学校の校章を取りあげ、北海道の「山梨」という地名について探ることにより、「明治四十年の大水害」と呼ばれる1907(明治40)年の山梨県での大水害を知る。このパートは、地名「山梨」の直接的な由来の追究による大水害の存在確認である。

パート2は、「なぜ北海道に山梨というところがあるのか」の追究をもう一步深めるため、「北海道への集団移住につながったほどの大水害は大雨による自然現象にすぎないか」を探るパートである。ここでは1907(明治40)年の大水害の発生・拡大について考察し、気象や地質・地形という自然的要因を関連づけるとともに、養蚕・製糸業の発展や鉄道整備の遅れなどに伴う山林の荒廃という社会的要因と結びつけ、大水害の現象構造を捉える。このパートは、大水害の現象構造認識づくりによる地名「山梨」の追究の深化である。

また、パート3は、「なぜ北海道に山梨というところがあるのか」の追究をさらに深めるため、「なぜ山梨県では山林の荒廃につながるほどに養蚕・製糸業が盛んだったのか」を探るパートである。ここでは明治期の山梨県における養蚕・製糸業の発展について考察する。地域産業の振興を目指す地域政治に支えられた養蚕・製糸業の発展やその結果においてうまれた養蚕・製糸業依存型の地域経済、さらに藩体制解体後の中央集権体制下での国主導による日本経済の近代化の推進、欧米工業諸国と日本と他のアジア諸国の国際経済関係へと掘り下げ、大水害の背後構造を捉える。このパートは、大水害の背後構造認識づくりによる地名「山梨」の追究の深化である。

これらパート2とパート3は、北海道の地名「山梨」の追究を大水害の存在レベルに留めず、大水害の現象構造レベル、さらに背後構造レベルへと深めるパートである。

パート4は、以上を踏まえて、「なぜ北海道に山梨というところがあるのか」という問いに答えなおすパートである。ここでは北海道への集団移住につながった1907(明治40)年の大水害の存在、現象構造、背後構造の認識を整理する。北海道の「山梨」という地名と1907(明治40)年の大水害の社会的な成り立ちを捉え、学習内容を改めて確認する。とともに、この小単元の学習を踏まえて、以後の授業や個人学習につながる新たな疑問をもつ¹⁰。このパートは、地名「山梨」の追究のまとめと新たな追究の準備である。

このように小単元「北海道の『山梨』」では、「なぜ北海道に山梨というところがあるのか」をパートの進行に伴ってレベルを変化させながら繰り返しかえし追究する。[1 地名「山梨」の追究による大水害の存在確認]から、[2 大水害の現象構造認識づくりによる地名「山梨」の追究の深化]、[3 大水害の背後構造認識づくりによる地名「山梨」の追究の深化]、[4 地名「山梨」の追究のまとめと新たな追究の準備]へと進む。北海道の地名「山梨」について取りあげ、その追究の反復的段階的進行において「明治四十年の大水害」の存在と現象構造・背後構造を捉えさせ、地名「山梨」の由来や大水害の構造とともに明治期の山梨県の地域社会や日本社会や国際社会を認識できるようにするわけである。素材の追究を通じて、主題に対する認識づくりを繰り返しながら深め、段階的に学習内容へと迫っていきけるようにするのが、この小単元「北海道の『山梨』」の基本構成である。

III 認識づくりの構造

小単元「北海道の『山梨』」では、学習者が自らの頭の中にもっているものを使って考え、その限界をのりこえるために社会的なレベルで物事について捉えたり考えたりする社会的見方考え方に改め、新たな認識をうみだせるようにすることを狙う。各パートにおいては、学習者が既存の見方考え方を投入したり変形・拡大したりすることで認識をつくるとともに新たな問題をもつことを学習の基本枠組とする。このような基本枠組を問題の進化に沿って反復的に繰り返しかえすことにより、既存の見方考え方を社会的な見方考え方に改めつつ取り組む認識づくりによって学習内容を新たな見方考え方とともに学べるようにする。各パートにおける認識づくりの学習構造を整理すると、表2の通りである。

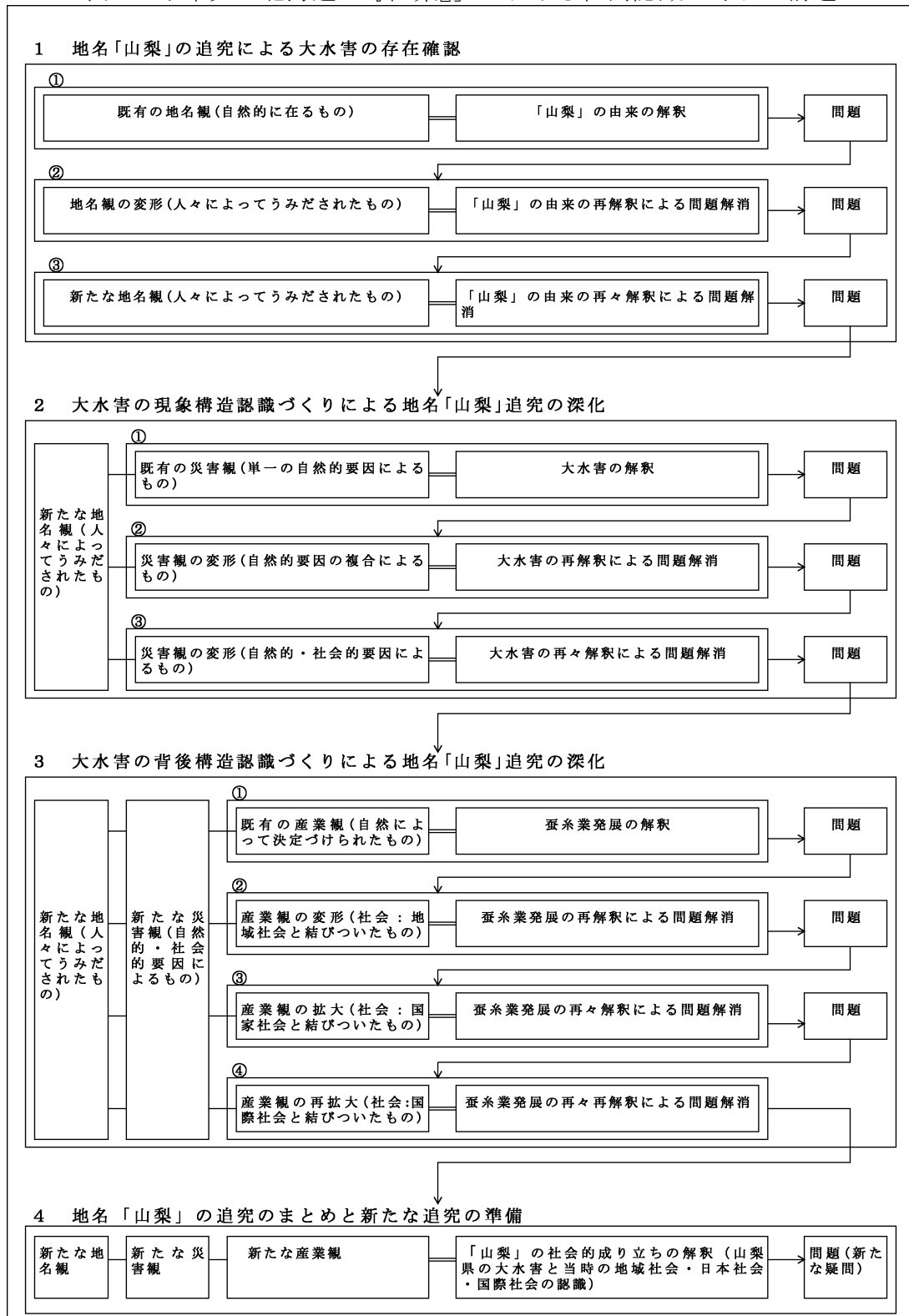
ここでは、大水害の背後構造の認識づくりを行うパート3の場合に即して、具体的に説明してみよう。

パート3の学習は、パート2の学習の結果においてうまれた「なぜ山梨県では山林の荒廃を招くほどに養蚕・製糸業が盛んだったのか」という問題のもと、四つのサブパートですすむ。何れのサブパートにおいても、学習者は産業の見方考え方を投入したり変形・拡大したりすることで認識をつくるとともに新たな問題をもつ。

サブパート①では、学習者は最初、昔の産業は自然によって決定づけられたものという既存の素朴な産業観を使って、山梨県における養蚕・製糸業の発展を解釈しようとする。そこで「扇状地が多いので養蚕・製糸業が盛んだったのか」を問い、扇状地が桑の生育に適していることを確認し、自然的前提が産業に関わっていることを確かめる。とともに、養蚕・製糸業の生産が明治期に著しく伸びたこと、現在は養蚕・製糸業が盛んではないことなどから、既存の産業観やそれに基づく解釈の不十分さに気づき、「山梨県の養蚕・製糸業が自然条件を活かしつつ急速に発展したのは、どうしてか」という問題をもつ。

¹⁰ 社会科授業のオープンエンド化については、片上宗二『オープンエンド化による社会科授業の創造』、明治図書、1995年、参照。

表2 小单元「北海道の『山梨』」における社会認識づくりの構造



サブパート②では、その問題を問い、器械製糸の山梨県における早期導入などの事実を知り、自然的前提のもとでの人々の取り組みやそれを支えた仕組みに着目する。山梨県勸業製糸場の建設や養蚕業の普及促進によって地域産業の振興を目指した地域の政治と結びつけたり、養蚕・製糸業に依存し

その好不調が地域全体を構造的に左右する養蚕・製糸業依存型の地域経済を捉えたりする。産業は自然を前提としつつ地域の社会と結びついたものという新たな産業観へと既存の産業観を变形し、山梨県における養蚕・製糸業発展の再解釈を行う。また、養蚕・製糸業が発展したのは山梨県だけではないという事実から、再解釈の不十分さに気づき、「養蚕・製糸業が山梨県だけで発展したわけではないのはどうしてか」という新たな問題をもつ。

この問題を解くため、サブパート③では、山梨県勸業製糸場と富岡製糸場の対比・関連づけにより、国の働きかけに気づく。民間主導ではなく国主導で推進された経済の近代化、国による産業の育成を必要にした近代国家形成・不平等条約改正という国家目標、および、江戸時代の体制のなかでの企業の未成熟や産業発展の条件の未整備、国による主導を可能にした中央集権体制を捉える。社会と結びつけて理解する産業観を地域社会だけでなく国家社会とも結びつけて理解する新たな産業観へと拡大し、山梨県における養蚕・製糸業発展の再々解釈を行う。一方、当時の国内における製糸業と絹織物業の規模の違いから需要面を意識し、再々解釈の不完全さに気づき、「養蚕・製糸業が大きく発展するほどに生糸が売れたのはどうしてか」という問題をもつ。

サブパート④では、その問題を問い、山梨県製の生糸の商標に記された絵や文字などを手がかりにし、外国との関係に目を向ける。国際経済への日本経済・山梨県経済の編入、そして、日本と欧米諸国の貿易、日本と他のアジア諸国の貿易、欧米諸国における産業革命や日本における急速な工業化による三者の関係を捉え、山梨県や日本における養蚕・製糸業の発展を国際関係と関連づける。社会と結びつけて理解する産業観を地域社会や国家社会とともに国際社会とも結びつけて理解する新たな産業観へと拡大し、山梨県における養蚕・製糸業の再々再解釈を行うことにより、「なぜ山梨県では山林の荒廃を招くほどに養蚕・製糸業が盛んだったのか」という問題を解き、大水害の背後構造の認識をまとめる。

このようにパート3の学習は、学習者が産業についての既存の見方考え方を投入したり変形・拡大したりして明治期の山梨県における養蚕・製糸業の発展の解釈を行うことで新たな認識をうみだすことや新たな問題に気づくことを基本枠組としている。そのような基本枠組を問題の進化に沿って四つのサブパートで反復的に繰り返すことで大水害の背後構造の認識を深めていく構造になっている。

その他のパートでも、そのように既存の見方考え方の投入や変形・拡大によって認識をうみだすことと問題に気づくことを基本枠組とし、それを反復的に繰り返すことで学習をすすめていくようになっている。パート1では、地名観を自然的にあるものとしての地名から、人為的にうみだされたものとしての地名へと改め、「山梨」という地名の由来を解釈し、大水害の存在を捉える。パート2では、災害観を単一の自然的要因によるものとしての災害から、自然的要因の複合によるものとしての災害、自然的要因とともに社会的要因と結びついたものとしての災害へと改めることにより、大水害の現象構造の解釈を行う。これらでは各々、次のパートへの問題もうみだす。また、パート3では、上述の通り、産業観を自然によって決定づけられたものとしての産業から、地域社会と結びついたものとしての産業、地域社会・国家社会と結びついたものとしての産業、地域社会・国家社会・国際社会と結びついたものとしての産業へと改めることにより、大水害の背後構造を解釈する。最後、パート4では、この小単元を通して身につけた地名・災害・産業の社会的な見方考え方に基づいて追究の成果をまとめ、さらに新たな疑問をもち、新たな追究を準備する。

小単元「北海道の『山梨』」では、このような基本枠組とその反復による認識づくりとして各パートの学習を行う。この小単元においては、社会の物事は自然現象のようなものではなく諸条件下での人々の判断や行為の集積の結果として作りだされているという見方考え方を重視し¹¹、学習者が各パートにおいて地名や災害あるいは産業のそのような社会的見方考え方へと既存の見方考え方を改めつつ認識や問題をつくりだせるようにする。さらに、それを四つのパートにおいて行うことによ

¹¹ 野村一夫『リフレクション』、文化書房博文社、1994年、参照。

り、学習内容を段階的に学んでいく小单元全体の学習もまた学習者による認識づくりとしてすすめられるようにする。

IV 学習指導計画

小单元「北海道の『山梨』」は、学習者が地名・災害・産業の既存の見方考え方を社会的な見方考え方に改めつつ北海道の「山梨」という地名の追究を深めていく認識づくりにより、1907(明治40)年の大水害や山梨県における養蚕・製糸業の発展について取り組み、明治期の山梨県の地域社会や日本社会また国際社会にまで掘り下げてわかることを可能にしようとするものである。

そのような小单元「北海道の『山梨』」の学習指導計画を表3として示そう¹²。

表3 小单元「北海道の『山梨』」の学習指導計画

【单元名】

中学校社会科歴史的分野：小单元「北海道の『山梨』」（5時間）

【单元目標】

- ◎北海道の「山梨」という地名の成り立ちを追究し、山梨県から北海道への集団移住につながった「明治四十年の大水害」の存在・現象構造・背後構造の認識をうみだす。
- ・既存の地名観を改めつつ、北海道の「山梨」という地名の由来について探り、多くの被災者の北海道移住につながった1907(明治40)年の山梨県における大水害との関連の認識をうみだす。
- ・既存の災害観を改めつつ、大水害の発生について探り、気象や地質・地形という自然的要因を関連づけるとともに、養蚕・製糸業の発展や鉄道整備の遅れなどに伴う山林の荒廃という社会的要因と結びつけ、1907(明治40)年の大水害の現象構造の認識をうみだす。
- ・既存の産業観を改めつつ、山梨県における養蚕・製糸業の発展について探り、地域産業振興を目指す地域政治に支えられた養蚕・製糸業の発展やそれによって生まれた養蚕・製糸業依存型の地域経済、さらに藩体制解体後の中央集権体制下での国主導による日本経済の近代化、日本と欧米諸国やアジア諸国の国際経済関係へと掘り下げ、1907(明治40)年の大水害の背後構造の認識をうみだす。

【学習展開】

過程	教師あるいは学習者による問い	資料	学習者による回答
① 既存の地名観に基づく山梨Vの由来の	・この校章は、ある小学校のものだが、どこの小学校のものだろうか。	1	・中心に「山梨」という文字があるので、山梨県内の学校あるいは山梨市内の学校の校章ではないか。
	・この校章は北海道豊浦町山梨の近年閉校になった山梨小学校のものだが、どうして北海道に山梨というところがあるのだろうか。		・偶然の一致ではないのか。
	・どうして偶然の一致だと思うか。		・地名は昔から自然的に存在しているものだと思うから。
	・山梨小学校の昇降口のステンドグラスの写真を見てみよう。そこには何が表現されているか。	2	・ステンドグラスには富士山などの風景が描かれている。
	・北海道に山梨という地名は一カ所だけだろうか。また、その他に気になる地名はないだろうか。	3	・羊蹄山のまわりに山梨という地名のところがいくつかある(豊浦町山梨, 豊浦町新山梨, 倶知安町山梨)。 ・それらの近くに京極町甲斐という地名のところもある。

¹² この小单元「北海道の『山梨』」の学習指導計画は、共同研究者5名が服部を中心にして全体の基本構想を練り、それに従って原案づくりを分担して行った後(原案づくりの分担は、パート1-鈴木, パート2①②-萩原, パート2③-齋藤・古川, パート3-齋藤, パート4-古川), 協議・修正を重ねることで、一往の完成に至ったものである。

解釈と問題発見 ②地名観の変形に基づく山梨Vの由来の再解釈と問題発見の存在確認	<ul style="list-style-type: none"> ・本当に偶然の一致なのだろうか。 ◎なぜ北海道に山梨というところがあるのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単なる偶然の一致とは考えづらい。どうして北海道に山梨という地名があるのだろうか。 ・北海道の山梨は山梨県と何か関係があるのではなかろうか。
	<ul style="list-style-type: none"> ○北海道の山梨は山梨県と何か関係があるのか。 ・北海道には他にも他の地域に由来しているような地名があるか。地図帳の地図でさがそう。 ・それらの地名にはどのような由来があるのだろうか。教科書の記述から考えてみよう。 ・北海道は江戸時代にはどのようなようであったのか。江戸時代についての学習を振り返ってみよう。 ・蝦夷地は明治維新後に北海道と改められて政府の主導で開拓がすすめられたが、それはどうしてだろうか。 ・北海道の山梨も山梨県からの移住者たちが住んだところなのか。山梨小学校の開校の経緯についての文章で確かめよう。 ・そこは山梨県の人たちが屯田兵制度で移住したところなのだろうか。この制度はずっとつづいたのだろうか。 ・明治40年代前半に山梨県から3130人もの人たちが北海道の羊蹄山付近へ移住したそうだが、個人個人の自由な判断で移住したということだろうか。 ・短期間に山梨県から多くの人たちが北海道へ移住したのはどうしてだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・北広島、伊達、京極など、北海道には他地域に由来しているような地名がある。 ・明治維新後、政府は1869(明治2)年に開拓使を置き、1875(明治8)年から屯田兵制度によって士族たちを移住させた。また、1890年代においては平民も移住できるようにしたために移住者は増加した。 ・集団で移住した地域では、移住した集団や元々の居住地に因んだ地名がつけられた。 ・独自の文化をもったアイヌの人々が狩猟・漁撈や交易などによって暮らしていた。 ・北海道は蝦夷地と呼ばれ、南部には松前藩が置かれていたが、幕末期に直轄地となった。 ・明治維新後、独立維持のための北方警備、産業発展のための農業・炭坑開発をねらうとともに、士族の救済を図った。 4. 北海道の山梨は、明治40年代前半に山梨県からの移住者が移り住んだところである。 ・山梨という地名は、それに伴って名づけられたものである。 ・北海道の山梨は山梨県の人たちが屯田兵制度で移住したところなのではないか。 ・屯田兵の募集は1900(明治33)年に停止された。但し、北海道の開拓はつづけられた。 ・北海道の山梨は山梨県の人たちが移住したところではあるが、屯田兵制度で移住したところではない。 ・短期間に個人個人の自由な判断で移住したにしては人数が多い。3130人もの多くの人たちが移住したのはどうしてだろうか。
	<ul style="list-style-type: none"> ○山梨県から多くの人たちが北海道へ移住したのはどうしてか。 ・当時は容易に移住することができたのだろうか。 ・移住のための費用は、どうしたのだろうか。 ・移住者が移り住んだ頃に山梨県で何かあったのではないか。『ふるさと山梨』の「山梨の歴史年表」(pp.94-95)でさが 	<ul style="list-style-type: none"> 5. 鉄道と船を使い、幾日もかけて移住した。 ・また、旅費とともに、当座の生活費や農業関係費が必要になる。当時、山梨県から北海道への移住は金銭的に容易ではなかった。 6. 費用は、国と県からの補助金でまかなわれた。この山梨県からの移住者は、「特別保護移住者」として扱われ、旅費や当座の生活費・農業関係費が支給された。 ・どうして国や県は特別な扱いをしたのだろうか。何か理由があって山梨県の人たちを移住させる必要があったのではないだろうか。 ・山梨県では今から約100年前の1907(明治40)年8月下旬に大きな水害があった。これは「明治四十年の大水害」と呼ばれている。1910(明治43)年にも大き

パート1 地名入山梨Vの追究による大水害の存在確認	してみよう。 ・約 100 年前の「明治四十年の大水害」はそんなに大きな水害だったのか。そのときの新聞記事を見てみよう。 ・被害はどの程度だったのだろうか。 ・山梨県から北海道へ 3130 人もの人たちが移住したが、移住した人たちはどういう人たちであったのか。 ・このケースは災害による国内移民といえるが、歴史的世界的に見ると他にどのようなケースがあるか。	な水害が起こっている。 7 ・「明治四十年の大水害」は新聞が大々的に報道するほどの大水害であった。 8 ・1907(明治 40)年 8 月下旬の水害では、山梨県全体で死者が 233 名、全壊・流失家屋が 5767 戸、埋没・流失した田畑・宅地が 650 ヘクタール、山崩れが 3353 カ所であった。 ・山梨県から北海道へ移住した人たちは、「明治四十年の大水害」などの水害で土地や家を失った被災者のなかで移住を希望した人たちである。 ・明治維新後の北海道開拓の推進というねらいもあったといっても、特別な公的援助が行われたほどだから、大惨事だったのであろう。 ・移住しなければならぬほどの大水害がどうして起こったのだろうか。 ・国内移民と国際移民。 ・災害からの脱出の他、経済的な理由による移動、宗教的迫害や政治的迫害・政治的混乱からの脱出、戦争からの脱出、など。
	・北海道へ移住した被災者の暮らしは高冷地であることや冷害が起こることなどで大変厳しかったとされるが、移住した被災者は移住地をどんな思いで山梨と呼んだのだろうか。 ・北海道の地名だけが人によってつくられたのだろうか。最近、山梨県では市町村合併によって幾つかの新しい地名がうまれたが、どのようなものがあるか。 ・地名は自然的に存在するものか。 ◎ どういうことで北海道に山梨という地名があるのか。 ・北海道への集団移住につながったほどの大きな水害が起こったのはどうしてだろうか。	・北海道に移り住んだ被災者は、大水害のために去った故郷を懐かしく想う気持ちと苦しいながらも新天地でなんとか頑張っていこうという希望の気持ちを込め、移住地を山梨と呼んだだろう。 ・北海道の山梨という地名は人によってうみだされたものである。 ・甲斐市、甲州市、笛吹市、北杜市、南アルプス市、など。 ・地名は人によってうみだされるものである。 ・山梨県では 1907(明治 40)年に大水害が起こり、大水害の被災者の救済と北海道開拓の推進をねらった公的援助のもと、多くの被災者が移り住んだ。北海道の移住先では山梨という地名が用いられた。山梨という地名は、北海道に移り住んだ被災者の故郷を想う気持ちや新天地での希望の気持ちと結びついたものである。 ・北海道への集団移住につながったほどの大きな水害が 1907(明治 40)年に山梨県で起こったのはどうしてなのだろうか。
	・どうして大水害が起こったのだろうか。 ◎ 北海道への集団移住につながったほどの大水害は大雨による自然現象にすぎないか。 ○ 大水害が起こったのは雨がたくさん降ったからか。 ・1907(明治 40)年 8 月 22 ～ 27 日の大水害のときの降水量分布図を見て、山梨県の東部と西部のどちらで被害がより大きかったらと考えるか。	9 ・水害は洪水などによる被害のことなので、洪水になったのではないか。 ・8 月で雨がたくさん降って洪水になったのではないか。 ・災害は自然現象によるものであろう。 ・山梨県の東部で被害がより大きかったのではなかろうか。

<p>パート2 大水害の現象構造認識づくりによる八山梨V追究の深化</p>	<p>① 既有的の災害観に基づく大水害解釈と問題発見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どうしてそう考えるのか。 ・ 山梨県の東部のなかでも、どの辺りが最も被害が大きかったらと思うか。 ・ どうしてそう考えるのか。 ・ 今の大月市などの辺り（北都留地域）では、そのときの降水量はどれくらいであったか。 ・ 『ふるさと山梨』（p.19）に掲載されている雨温図によると、大月市の例年の8月の降水量は約250ミリ程度であるが、それとくらべて大雨であるといえるか。 ・ 実際、山梨県の東部や今の大月市などの辺り（北都留地域）では、被害が大きかったか。死者数や被害家屋数のグラフから読みとろう。 ・ 大雨は大水害と関連があるか。 ・ それでは今の大月市などの辺り（北都留地域）が山梨県で最も被害が大きかった地域か。 ・ 今の笛吹市などの辺り（東八代地域）でも大雨が降ったのか。 ・ 降水量の最多地域と被害の最大地域が完全に一致しないが、大雨だけが大水害の要因といえるか。 ・ どうして降水量の最多地域と被害の最大地域が完全に一致しないのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 山梨県の西部よりも東部で降水量が多かったから。 ・ 水害というものは大雨によるものだと考えるから。 ・ 今の大月市などの辺り（北都留地域）で被害が大きかったのではないか。 ・ 今の大月市などの辺り（北都留地域）で最も降水量が多かったから。 ・ 水害というものは大雨によるものだと考えるから。 <p>9</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 700mmをこえる降水量であった。 ・ 大月市などの辺り（北都留地域）で降った雨は豪雨であったといえる。 <p>10</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 山梨県の西部よりも東部で被害が大きかった。 ・ 今の大月市などの辺り（北都留地域）では被害が大きかった。 ・ 大雨と大水害は関連がある。 <p>10</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今の笛吹市などの辺り（東八代地域）が最も被害が大きかった地域であるといえる。 <p>9</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 笛吹市などの辺り（東八代地域）のそのときの降水量は500mmにせまる大雨であったが、700mmをこえた大月市などの辺り（北都留地域）よりは少なかった。 ・ 大雨だけが大水害の要因とはいえないのではないだろうか。 ・ どうして降水量の最多地域と被害の最大地域が完全に一致しないのか。他にどのような要因がかかわっているのだろうか。
	<p>② 災害観の変形に基づく大水害再解釈と問題発見</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ どうして降水量の最多地域と被害の最大地域が完全に一致しないのか。 ・ 今の笛吹市などの辺り（東八代地域）での被害にはどのような傾向を見出せるか。被害状況の写真や証言もあわせて検討してみよう。 ・ 石和の付近では笛吹川の川筋が現在のようにならなくなってしまったほどであるが、土石流による被害が大きかった理由として大雨の他に何が考えられるだろうか。 ・ この地域を流れる笛吹川・日川・金川などの上流域は、どのような地質か。 ・ 花崗岩は風化すると砂状になって脆くなるが、そのことと水害は関係があるだろうか。 ・ 山梨県内の他の地域の地質も脆いのではないか。 	<p>10</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 死者が多いだけでなく、損壊家屋が著しく多い。 <p>11</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 水が引いた後に土砂で家の一階部分が埋没していたほどであり、土石流による家屋の損壊がきわめて多かった。 ・ 土石流が著しく激しかったということから、降雨という気象だけでなく、地質も関係しているのではないか。 <p>12</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 笛吹川・日川・金川などの上流域の地質は、花崗岩などである。 ・ 脆い地質は大雨のときには山崩れや土石流を引き起こしやすい。 ・ 山梨県がある場所の地質は、フォッサマグナ（大きい溝という意味）に新しい地層がつもることのできているので、脆弱な地質である。 ・ 山梨県の地域全体が地質からみて大雨に弱いといえるが、特に今の笛吹市などの辺り（東八代地域）で被害が大きかったのはどうしてだろうか。気象や地形

<p>②災害観の変形に基づく大水害の現象構造認識づくりによる山梨V追究の深化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 気象や地形の他にも何か関係しているのだろうか。 ・ 地形にも関係があるのだろうか。その辺りの地形はどのようなものか、大水害の頃の地形図で確かめよう。 ・ 扇状地とは何か。確認しよう。 ・ 扇状地では水害が起こりやすいのか。 ・ 大水害は大雨のみによるものだったか。 ・ 気象・地質・地形の結びつきという自然的要因だけが大水害の原因だろうか。地質や地形からすれば、それまでにも水害は起こっていたのではないか。そうであれば、水害の予防策をとってきたはずではないのか。 ・ 被害を少なくするための対策として、どのようなことが考えられるか。 ・ 当時、水害が多かったので復旧に追われて根本的な治水事業が難しかったであろうが、治山のほうはどうだったのだろうか。 ・ 山梨県では植樹も行われたが、1900年頃に県内では年間に30万立方メートルの樹木が減っていたというが、山林は整備保護されていたといえるか。 ・ 大水害は全くの自然現象のようなものといえるか。 ・ 明治期、山梨県において、山林が荒廃したのは、どうしてか。 	<p>の他にも何か関係しているのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 気象や地質とともに地形にも関係があるのではないだろうか。 ・ 甲府盆地の東部に位置し、笛吹川をはじめとする諸河川の扇状地である。 ・ 山から平地への河川の出口を頂点(扇頂)にし、河川によって運ばれてきた砂礫が扇形にひろがって堆積した緩やかな勾配の堆積地形を扇状地という。 ・ 扇状地では、河川が土砂を運んでくることにより、河川は河床が高くなるし、河川が網状になりやすく、流路が不安定である。また、土砂をつくりだしやすい山岳を抱えており、大雨のときには土石流が直撃する。扇状地では大雨のときには水害が起こりやすい。 ・ 大雨という気象、脆弱な地質、扇状地という地形が結びつき、山の地盤が大雨でゆるんで土石流がうまれて流れ込んできたため、多くの家屋が損壊したとともに、多くの死者がうまれた。いろいろな自然的要因が結びつくことで大水害が起こった。 ・ 災害は自然的な諸要因が結びつくことで起こる。 ・ 実際、山梨県では1907(明治40)年の大水害の以前にも、多くの水害が起こっていた。 ・ 水害が多発している地域に住む人たちが予防策をとっていないかとは考えにくいですが、実際はどうなのだろうか。被害を少なくするための対策はしていなかったのだろうか。 ・ 堤防を築くなどの治水が重要である。 ・ 山林を整備保護する治山が重要である。 ・ 山梨県の約8割は山地である。水害の予防のために治山は当然のこととして行っていたのではないだろうか。 ・ 当時、県が植樹をすすめたが、速効性はなく、山林の木がどんどん減っていった。当時、山林の荒廃は著しかった。 ・ 大水害の発生では、気象と地質・地形という自然条件が結びつくとともに、山林の荒廃もかかわっている。 ・ 水害の恐ろしさを知っているはずの山梨県の人たちが明治期に山林を荒廃させてしまうことになったのはどうしてだろうか。
	<p>○明治期、山梨県において山林の管理が混乱したとはいえ、山林を荒廃させてしまったのはどうしてか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 明治期になって山梨県の山林の多くが官有林にされ、その後に皇室財産とされたこと、また1904～05年の日露戦争のために国家財政が苦しかったことなどにより、山林の管理がうまくいかず混乱したという面もあるが、それにしても山林の荒廃が著しくすすんでしまったのはどう 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 桑が増えた。

パート2 ③災害観の変形に基づく大水害再々解釈と問題発見
大水害の現象構造認識づくりによる八山梨V追究の深化

いう理由によってか。大水害の頃の地形図をもう一度見てみよう。それよりも約20年前の地形図と見くらべてみて、山林の様子に変化があるか。

- ・ 桑は自生したのだろうか。
- ・ どういう目的で桑を植えたのか。
- ・ 桑は、たくさんの場所で作られていたか。
- ・ 養蚕をしてどうするのか。
- ・ 当時、山梨県では、繭の産出高はどのようであったか。
- ・ 当時、日本では養蚕が盛んだっただけか。
- ・ 養蚕のために桑畑をつくることは山林の木が減った理由か。
- ・ 木が減っていった理由は養蚕だけか。木を何か目的で利用していなかったか。
- ・ 木が減っていった理由は養蚕だけか。木を何かの目的で利用していなかったか。
- ・ この写真は何の写真だろうか。
- ・ それは何の工場だろうか。当時、山梨県で盛んであった工業とは何か。
- ・ 山梨県では、どの程度、製糸業が盛んであったのか。
- ・ 製糸工場で薪を何に使ったのだろうか。
- ・ 実際には何に薪を使ったのか。燃料にしたのか。
- ・ 器械製糸とは何か。
- ・ 1900年頃に山梨県内の製糸工場全体で年間に1万5千トン近くの薪が使われたといわれる。養蚕で蚕室を暖めるためにも使われたが、製糸のために薪を使うことは、山林の木が減ったことに関連があるか。
- ・ 薪に代わる別の燃料を使わなかったのはどうしてだろうか。
- ・ 当時、同じく養蚕・製糸業が盛んであった長野県や群馬県では、石炭を使っていた。日本では薪に代わる別の燃料の使用が可能であったが、どうして山梨県では薪を使っていたのだろうか。
- ・ 薪に代わる別の燃料を使わなかったのは

- ・ 短期間で急に桑がたくさん自生したとは考えられない。
- ・ 桑の葉を蚕の飼料にするために桑をつくった。
- ・ 桑はたくさんの場所で作られていた。
- ・ 養蚕は、蚕の繭から生糸をつくる製糸のために行われた。
- ・ 明治期、山梨県の繭の産出高は高かった。
- ・ 長野県や群馬県などをはじめとして、当時の日本では養蚕が盛んであった。
- ・ 養蚕において蚕の飼料とする桑の葉のために桑畑をひろげていったことは、山林の木が減っていった理由である。
- ・ 木が減っていった理由は養蚕だけか。木を何かの目的で利用していなかったか。
- ・ 工場のすぐ近くに薪が積んである。
- ・ この写真は製糸場の写真である。山梨県では養蚕と結びついた製糸業が盛んであった。
- ・ 山梨県の生糸の生産は、全国で上位であった。
- ・ 工場の写真に大きな煙突が写っている。薪を燃料にしたのではないか。
- ・ 繭を煮るために釜戸で湯を沸騰させるため。また、器械製糸の動力が蒸気力であったため（1890年代中頃より人力・水力から蒸気力へと転換）。
- ・ 器械製糸は、江戸時代末期からの手工業生産による座繰製糸と異なり、機械制生産による製糸の方法である。
- ・ 製糸などのために薪を使うことは山林の木が減った理由である。
- ・ その頃の日本ではまだ薪に代わる別の燃料が普及していなかったのではないだろうか。
- ・ 長野県や群馬県では石炭を使っていたのに、山梨県では薪を使っていたのは、どうしてか。薪に代わる別の燃料を使わなかったのはどうしてか。

パート2 ③ 大 水 害 の 現 象 構 造 認 識 づ く 大 水 害 再 々 解 釈 と 問 題 発 見 の 深 化	どうしてなのだろうか。		
	<ul style="list-style-type: none"> ・薪に代わる別の燃料を使わなかったのはどうしてか。 ・どうして山梨県では石炭を使わなかったのだろうか。 ・石炭がとれなくても運んでくればよいのではないか。長野県や群馬県では石炭をどうして使えたのか。 ・長野県や群馬県では、いつ鉄道が開通したか。 ・山梨県には鉄道を敷設しようとしていなかったのか。 ・鉄道は養蚕・製糸業にとってどのような意味をもつか。 ・実際に山梨県に鉄道が開通したのはいつか。 ・どうして中央線の開通が遅れたのか。『ふるさと山梨』の「山梨の歴史年表」(pp.94-95)も参考にしよう。 ・薪に代わる他の燃料を使うことができなかったのはどうしてか。 	19 19 19 20 19 21	<ul style="list-style-type: none"> ・石炭がとれず、使いたくても使えなかったのではないか。 ・長野県や群馬県には鉄道が通っていたので石炭を運べた。 ・群馬県では、1884(明治17)年、日本鉄道が上野-高崎間で開通した。長野県では、1893(明治26)年、信越線が全通した。 ・政府は、1892(明治25)年、甲府-八王子間の鉄道を敷設することを決めた。 ・1892(明治25)年、「対中央鉄道蚕糸業者意見」という意見書がだされるなど、山梨県では養蚕・製糸業関係の人たちを中心に鉄道の敷設を要望する意見が高まっていた。 ・石炭(燃料)、繭(原料)、生糸(製品)を輸送することができる。 ・1903(明治36)年、中央線が甲府-八王子間で開通した。 ・日清戦争(1894~95年)への出費により工事がすすまなかったため、また険しい山々に笹子トンネルをはじめとするトンネルを掘るといった難工事を伴ったため、鉄道の開通が遅れた。 ・中央線の開通が目指されていたが、日清戦争で工事がすすまなかったことや難工事を伴ったことから開通が遅れたため、石炭を移入することができなかった。
	◎「明治四十年の大水害」は大雨による自然現象にすぎないのか、まとめてみよう。		<ul style="list-style-type: none"> ・明治期になり、山林の管理が混乱するなか、養蚕のために桑畑をひろげたり、中央線の開通が日清戦争や難工事で遅れたので石炭の移入ができず、製糸などのために薪を使ったりしたことなどから、山林が荒廃し、それが被害を大きくした。山梨県で盛んであった養蚕・製糸業が鉄道整備の遅れもあって山林の荒廃につながり、大雨という気象や脆弱な地質や扇状地という地形といった自然的要因の結びつきによる水害を拡大させたといえる。 ・災害には自然的要因と社会的要因がある。 ・養蚕・製糸業の発展や鉄道の未整備などによる山林の荒廃という社会的要因と気象・地質・地形という自然的要因が結合して発生したといえる。 ・山林の荒廃につながるほどに山梨県で養蚕・製糸業が盛んになったのはどうしてなのだろうか。扇状地が多いので養蚕・製糸業が盛んだったのだろうか。
	◎なぜ山梨県では山林の荒廃につながるほどに養蚕・製糸業が盛んだったのか。		<ul style="list-style-type: none"> ・山梨県では扇状地が多いから養蚕・製糸業が盛んであったのではないか。 ・産業は自然条件によって決まるのではないか。 ・扇状地は養蚕に適しているのではないか。
	・どうしてそのように考えるのか。		
	○扇状地が多いので養蚕・製糸業が盛んだ		

<p>① 既 有 の 産 業 観 に 基 づ く 大 水 害 の 背 後 構 造 認 識 づ く り に よ る 山 梨 の 追 究 の 深 化</p>	<p>ったのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 山梨県では扇状地が多いか。改めて確認しよう。 扇状地は養蚕に適するのか。 養蚕と製糸業にはどのような関係があるのか。 全国的にみて明治期に養蚕・製糸業が盛んであったところはどこか、再確認しよう。それらには扇状地があるか、地図帳の地図で確かめよう。 山梨県も含めた当時の蚕糸県ではかねてより養蚕・製糸業が行われていたのだろうか。江戸時代の農村についての学習を振り返ってみよう。 産業(農業)は自然の条件で決まるといふことか。 それは本当だろうか。江戸時代と明治時代とでは、養蚕・製糸業の生産規模は同じか。 山梨県では現在、養蚕・製糸業が盛んか。現在、扇状地での農業では何が栽培されているか。 当時、桑が植えられのは扇状地だけだったか。 山梨県では扇状地が多いということだけで養蚕・製糸業が盛んになったといえるか。 山梨県の養蚕・製糸業が自然条件を活かしつつ急速に発展したのは、どうしてか。 	<ul style="list-style-type: none"> 甲府盆地には多くの扇状地があり、複合扇状地が形成されている。 扇状地の扇央は水に乏しく、米には適さないが、桑には適する。扇状地は養蚕に適するといえる。 養蚕は製糸の原料である繭を産出するものである。原料を他地域や他国に頼らず、近くで調達できれば、原料輸送の便がよく、製糸業にとって有利である。 <p>16</p> <ul style="list-style-type: none"> 明治期、山梨県の他、長野県や群馬県などで養蚕・製糸業が盛んであった。 かねてより農村で養蚕が行われ、生糸がつくられていた。 やはり、扇状地だから以前より養蚕が行われ、製糸も行われていたのではないか。 産業(農業)は自然の条件によって決まるのではないか。 <p>16</p> <ul style="list-style-type: none"> 生産規模は急激に伸びていった。 現在、果樹栽培が盛んである。山梨県は「果樹王国」とも呼ばれるほどである。 <p>13</p> <ul style="list-style-type: none"> 当時、桑が植えられのは扇状地ではなかった。 扇状地という自然条件だけで養蚕・製糸業が盛んであったとはいえない。産業は自然条件のみによって決まるとはいえないのではなからうか。 明治期、山梨県の養蚕・製糸業が自然条件を活かしつつ急速に発展したのは、どうしてか。養蚕農家や製糸業関係者などが頑張ったからだろうか。
	<p>○山梨県の養蚕・製糸業が自然条件を活かしつつ急速に発展したのは、どうしてか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 養蚕農家や製糸業関係者は頑張って産出を高めたか。 当時の新聞記事や『ふるさと山梨』の「山梨の歴史年表」(pp.94-95)も参考にしてみよう。 明治初期、器械製糸は一般的なものであったか。 どうして山梨県では当時の最新の器械製糸による工場が早くから増えていったのか。たくさんの製糸業者はどうやって器械製糸を知ることができたのか。『ふる 	<ul style="list-style-type: none"> 養蚕農家や製糸業関係者が頑張って産出を高めたのではないか。 例えば、山梨県では、器械製糸の民間工場が他県よりも早期に普及していった。製糸業の発展に伴う繭の需要の高まりにこたえて養蚕の産出も伸びていった。 1886(明治19)年、日本で初めて女性の労働者によるストライキが山梨県の雨宮製糸場で起き、まわりの製糸工場でも相次いだ。当時、製糸工場では女工がきびしい条件で働いた。 当時は、座繰製糸という手工的なが方法が一般的なものであったが、山梨県では器械製糸が普及した。山梨県では製糸工場で女工がきびしい労働条件で働いたこととともに製糸業者が早期に器械製糸を導入したことが製糸と養蚕の相乗的な発展にとって大きかった。 1874(明治7)年に藤村紫朗県令のもとで山梨県勸業製糸場が甲府市につくられたことが契機となった。その後、新しい生産技術や生産組織などを学んだ民間の器械製糸工場が増えていった。

パート3 ②産業観の変形に基づく蚕糸業再解釈と問題発見 大水害の背後構造認識づくりによる八山梨V追究の深化	さと山梨』(p.69)も参考にしてみよう。 ・山梨県勸業製糸場とは何か。 ・藤村紫朗県令の県政では何が目指されたのか。 ・山梨県における養蚕・製糸業の急速な発展は何によって支えられていたか。 ・山林を荒廃させていたにもかかわらず、養蚕・製糸業の急速な発展が抑えられることなくすすめられていったのは、なぜか。 ・そのことを確かめるためにはどのような資料が必要か。 ・県内の農家にとって養蚕はどのような意味をもつものであったか。現在の行事から読みとれることはできるだろうか。 ・かつて養蚕をしていた人の話を聞いたことはあるか。養蚕農家の生活はどのようなものであっただろうか。 ・山梨県の産業における養蚕の位置づけはどのようなものであったか、当時の生産額構成の表から読みとってみよう。 ・山梨県の産業における製糸業の位置づけはどのようなものであったか、当時の生産額構成の表から読みとってみよう。 ・養蚕・製糸業の位置づけはどのようなものであったか。 ・この当時、農業や工業の他にも、養蚕・製糸業の影響で潤っていたのだろうか。1903(明治36)年発行の「甲府繁盛寿語呂久」を参考にしてみよう。 ・明治期前半頃の山梨県は全国でも指折りの豊かな県であったとされるが、当時の山梨県の地域経済はどのような経済であったといえるか。 ・そのような地域経済には、どのような利点があるか。 ・そのような地域経済では、どのようなことが心配になるか。	・山梨県がつくった模範製糸工場をいう。 24 ・藤村紫朗県令の県政では、地域の産業の振興と教育の普及が中心に目指された。 ・産業の振興という点では、代表的なものとして山梨県勸業製糸場の建設、養蚕業の普及促進がある。 ・教育の普及という点では、藤村式学校と呼ばれる洋風な建築の校舎がつくられた。それらの幾つかは県内に資料館や記念館などとして現存している。 ・地域産業振興を目指した地域政治に導き支えられ、山梨県では器械製糸を早期に導入した民間工場が増加し、女性労働者がきびしい条件で働くとともに、自然条件を活かした養蚕がすすめられ、養蚕と製糸は連動して発展していった。 ・養蚕・製糸業が山梨県にとってとても重要なものだったのではないだろうか。 ・当時の山梨県の人たちにとっての養蚕の意味が読みとれる資料、当時の山梨県の産業における養蚕・製糸業の位置づけが読みとれる資料、など。 25 ・小正月のドンドヤキで繭玉と呼ばれる団子を花のようにして木を飾り、養蚕がうまくいくように祈ったりするなどした。 ・屋敷のなかに蚕室を設けるなど、養蚕は農家の生活に密接に結びついていた。 ・養蚕は主として女性によって担われていた。 ・養蚕は農家の収入源として重要視されていた。 26 ・当時の山梨県の産業構造における中心は第一次産業であった。 ・第一次産業のなかでも米作とともに養蚕はとても重要な産業であった。当時、農産品の商品化が一層すすんだ。 ・例えば、今の笛吹市などの辺り(東八代地域)では、生産額に占める農業生産額の割合、農業生産額に占める繭生産額の割合がともに高い。 26 ・工業生産の多くを製糸業が占めていた。 ・県全体の生産額構成において繭や生糸の比重は高かった。 27 ・当時、県内で唯一の都会であった甲府市では、商業が栄えた(周辺の農村地域から集まる人たちが重要な客であった)。 ・養蚕・製糸業に依存した養蚕・製糸業依存型の地域経済であった。 ・中心産業の好不調が地域経済全体を左右する。中心産業である養蚕・製糸業が好調なときには地域全体が潤う。 ・中心産業の好不調が地域経済全体を左右する。養蚕・製糸業が不振になることがあると地域全体が構造的に停滞・衰退するという危険性がある。
---	--	--

<p>パート3 大水害の背後構造認識づくりによる八山梨V追究の深化 ③産業観の拡大に基づく蚕糸業再々解釈と問題発見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・山林を荒廃させていたにもかかわらず、養蚕・製糸業の規模拡大がすすめられていたのは、どうしてか、養蚕・製糸業依存型の地域経済と結びつけて考えてみよう。 ・産業の展開は自然条件のみで決まるか。 ・養蚕・製糸業が発展したのは山梨県だけであったか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域産業振興を目指した藤村県政の地域政治に支えられて養蚕・製糸業が発展し、それが養蚕・製糸業依存の地域経済を結果的にうみだした。そのような地域経済では、中心産業が地域社会全体の浮沈にかかわり、生産の規模の継続的拡大が目指された。 ・産業の展開は自然を前提としつつ地域の社会との結びつきにおいて導かれている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・山梨県だけで養蚕・製糸業が発展したわけではないのはどうしてだろうか。 <p>○養蚕・製糸業が山梨県だけで発展したわけではないのはどうしてか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・模範製糸工場は山梨県の他にもつくられたのだろうか。教科書の絵で確認してみよう。 ・山梨県の勸業製糸場と群馬県の富岡製糸場は似ているか。 ・富岡製糸場は群馬県によってつくられたのだろうか。 ・実際はどうであったか、教科書で確認しよう。 ・山梨県の勸業製糸場とどちらが先につくられたのか。 ・明治初期につくられた模範工場は製糸工場だけか。教科書の地図で確認してみよう。 ・国は模範工場をつくって何をしようとしたのか。 ・当時、どうして民間にまかせずに国が先導したのか。 ・そのように明治期前半に国主導ですすめられた近代産業育成政策は何と呼ばれているか。 ・殖産興業の政策として行われたことに何があるか。教科書でさがそう。 ・殖産興業のためには多額の費用がかかるにもかかわらず、どうして急速な産業育成が目指されたのか。 ・どうして明治政府はそのような政策をす 	<p>16</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明治期、山梨県の他、長野県や群馬県などで養蚕・製糸業が盛んであった。 ・多くの地域で山梨県のように養蚕・製糸業の振興が図られたということなのだろうか。 ・この時期に他地域でも養蚕・製糸業が盛んになったのはどうしてなのか。他にも要因があるのだろうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・群馬県に富岡製糸場がつけられた。 ・当時の先進的な技術や仕組みを採用し模範を示そうとしていることで似ている。 ・山梨県の勸業製糸場の場合と同様、富岡製糸場は群馬県によってつくられたのではないか。 ・富岡製糸場は1872(明治5)年、国によってつくられた模範工場である。 ・山梨県の勸業製糸場は、1874(明治7)年につくられた。1872(明治5)年につくられた官営富岡製糸場のほうが先である。山梨県の勸業製糸場の設立は、官営富岡製糸場の設立を手本にしたのではないだろうか。 ・明治初期、製糸や紡績などの模範工場がつけられた。 ・模範工場をつくり、欧米諸国から導入した当時の先進的な技術や仕組みを採用し、民間にひろがっていくように模範を示し、それによって近代産業を育成することを目指した。 ・江戸時代の体制のなかでは先進的な技術や経営方法をもった企業が育っていなかったため、また、近代産業の発展のための条件整備がなされていなかったため、急速に短期間で工業化をすすめるためには国がリードする必要があった。 ・明治期前半に欧米諸国の技術や制度などを導入して国の主導によって近代産業を育成しようとした政策は、殖産興業と呼ばれる。 ・模範工場の建設、博覧会の開催、鉄道等の交通の整備、郵便制度等の通信の整備などが行われた。屯田兵制度も殖産興業としての性格を有している。 ・明治政府は近代国家の形成を目指し、植民地化を防ぐとともに当時の先進工業国に追いついて不平等条約を改正するためにも、軍事と経済を急いで近代化する必要があり、富国強兵・殖産興業を推進した。 ・1871(明治4)年の廃藩置県により、江戸時代の藩体

<p>パート3 大水害の背後構造認識づくりによる八山梨V追究の深化</p>	<p>すめることができたか。国内において明治政府の力はそれほど大きかったのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 山梨県も廃藩置県で誕生したのか。『ふるさと山梨』(p.12)で確かめてみよう。 明治政府はどのように殖産興業のような政策をすすめることができたのか。明治政府には安定した財源があったのか。 地方ごとに税の慣例もあったであろうに税制の統一化に反発はなかったのだろうか。教科書で調べてみよう。 山梨県の場合はどうだったのだろうか。『ふるさと山梨』(p.77)で調べてみよう。 山梨県の勸業製糸場の創設は殖産興業の国策に沿って行われたものか。 養蚕・製糸業の発展、養蚕・製糸業依存型の地域経済の形成にはどのようなことが基盤となったか。 産業の展開は地域の社会との結びつきにおいて導かれるのではないのか。 これで明らかになったか。殖産興業によって生産能力をもつことはできたが、つくられた生糸がそれほど売れたのだろうか。どうして売れたのだろうか。 明治期、絹織物業は発展したか。 養蚕・製糸業が大きく発展するほどに生糸が売れたのはどうしてか。 	<p>制にかわり、中央集権の体制が作りだされた。各県には中央から県令が派遣された(藤村県令も中央から山梨県に派遣された)。</p> <ul style="list-style-type: none"> 山梨県は1871(明治4)年の廃藩置県に基づき誕生した。11月20日は「県民の日」とされている。 1873(明治6)年の地租改正という税制改革により、中央集権体制の統一的な税制のもとで財源の安定化を図った。 地租改正に反対する騒擾が各地で起こった。 山梨県では、地租改正に先立つ大小切税法の廃止に対して97カ村6000人あまりの農民が県庁に押しかけたが、軍隊によって鎮められた。これは大小切騒動と呼ばれる。 殖産興業の国策に沿いつつ、山梨県における在来産業を活かした地域産業発展を目指したものである。 明治政府が廃藩置県・地租改正に基づく中央集権体制下で欧米先進国からの技術・知識などの移植のもとに主導した近代産業育成政策の一環において、山梨県では藤村県政下で養蚕・製糸業という在来産業の振興がすすめられた。藤村県政下の産業育成政策に支えられ、山梨県では自然条件を活かした養蚕が普及するとともに器械製糸を導入した民間工場が増加し、養蚕・製糸業が連動して発展することで結果的に養蚕・製糸業に依存した地域経済がうまれた。 産業の展開は、国の体制や政策にも左右される(国家規模の社会との結びつきにおいても導かれる)。 明治期、山梨県や他県において、生糸から織物をつくる絹織物業が発展し、それによって国内で生糸の需要が高まったのではないか。 明治期、製糸業が日本の工業の中心であった。絹織物業も次第に発展していったが、その規模は製糸業の規模とは水準が異なっていた。 養蚕・製糸業が発展したということは生糸のニーズが高かったはずである。殖産興業によって生産能力をもつことはできたが、養蚕・製糸業が大きく発展するほどに生糸が売れたのはどうしてか。
	<p>○養蚕・製糸業が大きく発展するほどに生糸が売れたのはどうしてか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 山梨県でも甲斐絹がつくられるなど、日本では絹織物業が成長していったが、製糸業の発展のほうが著しかったということは、生産された生糸はどうされたのだろうか。 当時の甲州生糸の商標から考えてみることにしよう。商標を見て気づくことを挙げてみよう。 どうして富士山が描かれたり山梨県という製造地が示されたりしたのだろうか。 どうして外国語が使われたのだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> 外国にたくさん輸出されたのだろうか。 富士山が描かれている。山梨県という製造地が示されている。外国語が使われている。 日本製であることや山梨県製であることをウリにしようとしたからであろう。 外国に売るためであろう。

パート3
④産業観の再拡大に基づく蚕糸業再々再解
大
水
害
の
背
後
構
造
認
識
づ
く
り
に
よ
る
山
梨
の
追
究
の
深
化

- | | | |
|--|----|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・当時の甲州生糸の商標からどのようなことが推測できるか。 ・生糸は本当に外国に輸出されたのか。 ・日本の生糸は主にどこに輸出されていたか。 ・山梨県などの東日本の蚕糸県で生産された生糸は、どこの港から輸出できたのだろうか。 ・どうしてそれが可能であったのか。 | 30 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本製であることや山梨県製であることをウリにして外国に売ろうとしていたのではなからうか。 ・大量の生糸が輸出されていた。生糸の生産量・輸出量は伸びていった。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・幕末期から生糸が輸出品の中心であったことから、殖産興業において製糸業が重視されたのはどうしてであったと考えられるか。 ・日米修好通商条約の後、生糸商売で財をなした"甲州財閥"の中心人物がいるが、知っているか。『ふるさと山梨』(p.90)でさがしてみよう。 ・甲州生糸の商標から、江戸時代末の「開国」の後、甲州(山梨)や日本の経済と世界の結びつきはようになったといえるか。 | 31 | <ul style="list-style-type: none"> ・生糸は主として欧米諸国へ輸出された。1880年代中頃以降、アメリカへの輸出が中心となった。 ・東日本の蚕糸県で生産された生糸は、横浜港から輸出された。 ・日米修好通商条約が結ばれ、神奈川(横浜)・長崎・箱館(函館)・新潟・兵庫(神戸)の開港などが約された。 ・生糸は幕末期より輸出品の中心となった。 ・製糸業は輸出産業であった。生糸の輸出は当初より、日本にとって近代化推進のための重要な外貨獲得源であった。だからこそ、殖産興業において製糸業は重視されたのだろう。 ・若尾逸平(1820～1913年)。若尾逸平は"甲州財閥"の中心人物であり、初代の甲府市長や県内初の貴族院議員をつとめた。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・1900年頃の日本と欧米諸国の貿易では、何が輸出され、何が輸入されていたか。商品別・国別の貿易の資料から読みとってみよう。 ・それはどのような関係といえるか。 | 32 | <ul style="list-style-type: none"> ・日米修好通商条約により、活発に貿易が行われるようになり、日本や山梨県の経済は国際経済のなかで展開されることになった。 ・欧米諸国への輸出品は、生糸が中心であった。欧米諸国からの輸入品は、鉄類・機械類、綿花や綿織物が中心であった。 ・日本と欧米諸国の貿易関係は基本的に、日本が軽工業製品を輸出し、欧米諸国から重工業製品や軽工業製品を輸入するという関係であった。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・日本は他の地域とも同じような貿易をしていたのだろうか。同じ頃の日本と他のアジア諸国との貿易では、何が輸出され、何が輸入されていたか。商品別・国別の貿易の資料から読みとってみよう。 ・それはどのような関係といえるか。 | 32 | <ul style="list-style-type: none"> ・アジア諸国からの輸入品は、綿花、米などの食料品が中心であった。アジア諸国への輸出品は、綿糸などが中心であった。 ・日本とアジア諸国の貿易関係は基本的に、日本が原料を輸入し、軽工業製品を輸出するという関係であった。 ・日本の対欧米貿易と対アジア貿易は性格が異なっていた。日本の貿易は二重構造的であった。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・日本から生糸がアメリカなどの欧米諸国へ輸出されたが、どうして生糸のニーズが欧米諸国で高かったのか。 ・アメリカはどうして絹織物の大量生産が可能であったのか。教科書を使って考えてみよう。 ・日本から欧米諸国への輸出品は生糸が中心であり、アジア諸国への輸出品は綿糸などが中心であったが、重工業製品を輸出したほうが利益が大きであろうに軽工業製品が輸出の中心だったのはどうしてだろうか。教科書を使って考えてみよう。 | 33 | <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカでは絹織物の大量生産がすすみ、絹織物業に適した品質や太さの生糸の需要が高かった(また、経済の発展により、高級品である絹製品の需要があった)。山梨県や他の蚕糸県の生糸は、模範工場によって民間工場に普及していった技術や国産の繭によって国際競争力をもった。 ・欧米先進諸国は19世紀までに産業革命を経て工業化がすすんでいた。 ・殖産興業以来の産業振興・産業発展により、中心的な輸出産業であった製糸業が発展し、日本は世界一の生糸輸出国となったし、以前は輸入品の中心であった綿糸の国産化がすすめられ、1900年頃には輸出品において生糸に次ぎ2位となるほどになった。日本では、産業革命は軽工業分野で日清戦争(1894～ |

<p>パート3 大 水 害 の 背 後 構 造 認 識 づ く り に よ る 山 梨 の 追 究 の 深 化</p>	<p>う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当時、欧米諸国は、世界の経済のなかでどのような位置にあったといえるか。 ・当時の日本と欧米諸国やアジア諸国の貿易はどのようにまとめることができるだろうか。図にも表してみよう。 ・そのような世界の結びつきはどのように表現できるだろうか、自分なりに考えてみよう。また、現在の世界の結びつきと似ているところや違っているところはどこだろうか。 ・どうして養蚕・製糸業が大きく発展するほどに生糸が売れたのか、まとめてみよう。 ・産業の展開は国内の社会との結びつきにおいて導かれるのではないのか。 <p>◎なぜ山梨県で養蚕・製糸業が盛んだったのか。</p>	<p>95)の前後に展開した。このように軽工業は成長したけれども、この時点では軽工業にくらべて重工業はまだ立ち遅れていた。重工業分野で産業革命が展開するのは日露戦争(1904～05)の前後である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本はアジアのなかではいち早く工業化をすすめたが、主要な欧米諸国は既に産業革命を経ている。 ・当時、産業革命を経た欧米諸国は工業先進国であり、原料・食料の供給地や工業製品の市場を海外に拡げていった。欧米先進諸国とその他の経済格差が大きくなった。例えば、イギリス・中国・インドのあいだに19世紀に成立した三角貿易など。 ・欧米の先進工業国に追いつこうと工業化をすすめていた日本は、他のアジア諸国との間では、原料を輸入し軽工業製品を輸出するという関係であった。既に産業革命を経て工業化をすすめた欧米諸国との間では、軽工業製品を輸出し重工業製品・軽工業製品を輸入するという関係であった。 ・明治期の世界の経済は欧米先進諸国が中心の世界経済であり、当時の日本と欧米諸国やアジア諸国のあいだに国際的な分業のしくみがうみだされた。 ・世界の一体化、諸地域世界の相互関連化、国際的な分業、など。 ・欧米諸国・日本・アジア諸国の国際経済関係において、生糸は産業革命を経た欧米諸国で需要が高く、大量に輸出された。山梨県などの蚕糸県は欧米諸国に生糸を大量に輸出することができ、製糸業は欧米諸国に遅れて工業の発展を目指していた日本の主要な輸出産業として養蚕業とともに伸びていった。山梨県は世界市場への生糸の主要な供給元の一つであった。 ・産業の展開は、国際社会との結びつきにおいても導かれる。 <p>◎欧米諸国・日本・アジア諸国の国際経済関係、藩体制解体後の中央集権体制下での国主導による日本経済の近代化、その一環において地域産業振興を目指す地域政治に支えられた養蚕・製糸業の発展やそれによって生まれた養蚕・製糸業依存型の地域経済により、日本は世界一の生糸輸出国となり、山梨県は世界市場への生糸の主要な供給元の一つとなった。</p>
<p>パート4 山 梨 の 追 究 の ま と め</p>	<p>◎なぜ北海道への集団移住につながるほどの大水害が1907(明治40)年に山梨県で起こったのか。</p> <p>◎なぜ北海道に山梨というところがあるのか。理由を説明づけてみよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・明治維新後、中央集権体制下において近代国家形成のための国主導による経済の近代化が推進され、先進的に産業革命を経た欧米諸国において生糸の需要が高かったこともあり外貨獲得源として製糸業の振興が目指された。山梨県では勸業製糸場などによって近代製糸業の育成が行われ、自然条件を活かした養蚕業とともに発展し、養蚕・製糸業依存型の地域経済が生まれた。この地域経済において養蚕・製糸業の発展や鉄道整備の遅れなどに伴ってすすんだ山林の荒廃により、集中豪雨と洪水リスクをもった地質・地形という自然の結びつきによる被害が著しく大きくなり、北海道への集団移住につながるほどの大水害となった。 ・明治期の国際経済関係、近代国家形成に向けた国・県による近代化の推進に支えられるとともに養蚕・製糸業依存型の地域経済をうんだ養蚕・製糸業の発展は、明治期の山梨県における経済発展に大きく寄与する一方、鉄道整備の遅れもあって、水害を拡大させた山林の荒廃という意図せざる結果にもつながった。その被災者たちが開拓の推進という近代国家

<p>と新たな追究の準備</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他に明治期の日本において近代産業発展の影で生まれた新たな問題を挙げることはできるか。教科書でさがしてみよう。 ・「明治四十年の大水害」と呼ばれている水害に改めて名前をつけるとしたら、あなたならばどのように名づけるか。 <p>◎この学習を通して新たに生まれた疑問はあるか。</p>	<p>形成に向けた政府のねらいもあって援助を受けて北海道に移り住み、その移住地が山梨と名づけられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・足尾銅山鉱毒事件など。 ・(略) <p>(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在の山梨県では、大雨への備えは大丈夫か。治山治水はどうなっているか。問題はないか。問題があるとすれば、それはどうしてか。地域においてどのような取り組みをすることがよいであろうか。 ・北海道の山梨における暮らしはどのようであったのだろうか。 ・「明治四十年の大水害」の後、山梨県では大水害からどのようにして復旧したのだろうか。 ・「明治四十年の大水害」の被害を大きくした山林の荒廃には他にも要因があるのだろうか。 ・山梨県や日本の養蚕・製糸業は、その後、どのように展開していったのだろうか。養蚕・製糸業中心の山梨県の地域経済は、どうなっていたのだろうか。 ・日本では産業革命がどのようにして可能になったのだろうか。 ・欧米諸国を中心とする世界の関係はどうなっていたのだろうか。それはどうしてだろうか。 ・山梨県では現在は養蚕・製糸業が盛んではなくなっているが、それはどうしてだろうか。理由や原因は地域や国内にあったのだろうか、外国との関係にもあったのだろうか。 ・山梨県の名前はどのようにして山梨とされたのだろうか。 ・産業の発展と自然環境破壊の抑制は両立できるのだろうか。どうすればよいのだろうか。 ・他の災害への備えは、どうなっているのだろうか。大地震が起こる危険性もあるといわれているが、地域としてどのような備えをすることがよいであろうか。
------------------	---	---

- 【授業用資料】 ※山梨県教育委員会『ふるさと山梨 中学校版』（2008年発行）に掲載の資料を除く。
- 1 - 山梨小学校の校章（新・豊浦町史編集委員会編『新・豊浦町史』、豊浦町発行、2004年、p.272より）。
 - 2 - 「山梨小学校の昇降口のステンドグラス」（『山梨県立博物館研究紀要』第2集、2008年、口絵版5より）。
 - 3 - 「北海道移住地に残る『山梨』」（山梨県立博物館『『米キタ』『アスヤル』-明治四十年の大水害から百年』、山梨県立博物館発行、2007年、p.4）。
 - 4 - 山梨小学校の沿革（渡辺茂編『豊浦町史』、豊浦町発行、1972年、pp.711-712より一部抜粋）。
 - 5 - 北海道への移住ルート（山梨県北都留郡誌編集会編『北都留郡誌』、名著出版、1973年、pp.1175-1178をもとに作成）。
 - 6 - 北海道移住経費の補助（河西秀夫「山梨県の明治期の水害とその社会的影響」（山梨学院大学社会科学研究所『社会科学研究』第26号、2001年、p.107より一部抜粋）。
 - 7 - 「水害視察記」（『山梨日日新聞』1907年8月27日号）（長田庄司編『サンニチ紙面で見える山梨の百年』、山梨日日新聞社、1970年、p.39より）。
 - 8 - 「明治四十年の大水害の被害データ」（山梨県立博物館編『『米キタ』『アスヤル』-明治四十年の大水害から百年』、山梨県立博物館発行、2007年、p.2）。
 - 9 - 「降水量分布図（明治40年8月22日～27日）」（山梨県立博物館編『『米キタ』『アスヤル』-明治四十年の大水害から百年』、山梨県立博物館発行、2007年、p.3）。
 - 10 - 明治40年の大水害による被害（山梨県編『山梨県史資料編14』、山梨県発行、1996年、pp.676・677より作成）。
 - 11 - 「土砂が道路に堆積した市部本通り（石和町）・「名誉<お助け>の柿の木」・「明治大水害で崩落した黒駒村（御坂町）金川水源」（写真）（笛吹市風水害誌編集委員会監修『笛吹市風水害誌』、山梨県笛吹市発行、2007年、pp.18・28・40より）、「明治大水害体験談」（笛吹市風水害誌編集委員会監修『笛吹市風水害誌』、山梨県笛吹市発行、2007年、pp.40-45）より一部抜粋）。
 - 12 - 「山梨県の地質図」（田中収編著『山梨県 地学のガイド』、コロナ社、1987年、巻末資料）。
 - 13 - 2万5000分の1地形図「石和」（明治44年）。
 - 14 - 「笛吹市風水害の歴史①」（笛吹市教育委員会文化財課「100年の災害の記録を未来へー笛吹市風水害誌発刊記念写真展リーフレット」、2007年）より一部改変）。
 - 15 - 「明治時代の笛吹市周辺地図（明治二十年代）」（笛吹市風水害誌編集委員会監修『笛吹市風水害誌』、山梨県笛吹市発行、2007年、pp.8-9より）。

- 16 - 「生糸産出高の地域性とその変化」・「繭産出高の地域性とその変化」(斎藤修・谷本雅之「在来産業の再編成」, 梅村又次・山元有造編『開港と維新』, 岩波書店, 1989年, p.237)より一部改変。
- 17 - 「山梨県製糸場」(写真)(甲府市市史編さん委員会編『甲府市史 別編Ⅲ』, 1993年, p.316より)。
- 18 - 「蚕糸絹業の基礎知識」(農畜産業振興機構 シルク情報ホームページ <http://sugar.lin.go.jp/silk/imfo/kiso/index.htm>), 「山梨県製糸場内の写真」(山梨県編・発行『山梨県史 資料編 16』, 1998年, 口絵より)。
- 19 - 鉄道敷設に関する年表(山梨県編・発行『山梨県史 通史編 5』, 2005年, pp.271-281をもとに作成)。
- 20 - 「対中央鉄道蚕糸業者意見」(中央鉄道期成蚕糸業聯合会「対中央鉄道蚕糸業者意見」(明治25年11月22日), 山梨県編・発行『山梨県史資料編 16』, 1998年, pp.496-504)より一部抜粋。
- 21 - 「山地鉄道の1哩当たりの工事費」(山梨県編・発行『山梨県史通史編 5』, 2005年, p.277)。
- 22 - 「製糸場数上位30府県一覧表(明治26年)」(富澤一弘「近代日本に於ける蚕糸業発展の軌跡—統計資料の検討を中心にして」, 『高崎経済大学論集』第44巻第4号, 2002年, p.77)。
- 23 - 「同盟罷工」(『山梨日日新聞』明治19年6月30日号)(長田庄司編『サンニチ紙面で見える山梨の百年』, 山梨日日新聞社, 1970年, p.10より)。
- 24 - 「県営製糸場と藤村式学校」(磯貝正義編『図説山梨県の歴史』, 河出書房新社, 1990年, pp.224-225)。
- 25 - 「平穏を願い どんど焼き」(『山梨日日新聞』平成20年1月14日号)。
- 26 - 「郡市別生産額構成(明治37年)」(斎藤康彦『産業の展開と地域編成』, 多賀出版, 1998年, pp.121)。
- 27 - 「甲府繁盛語呂久」(山梨県編・発行『山梨県史資料編 16』, 1998年, 口絵より)。
- 28 - 「業種別・規模別工場数と職工数(1902年)」(春日豊「工場の出現」, 『岩波講座日本通史 第17巻』, 岩波書店, 1994年, p.188)より一部抜粋。
- 29 - 「甲州生糸の商標」(山梨県編・発行『山梨県史資料編 16』, 1998年, 口絵より)。
- 30 - 全国の生糸生産量と輸出量(長岡新吉・田中修・西川博史『近代日本経済史』, 日本経済評論社, 1980年, p.56をもとに作成)。
- 31 - 「生糸輸出先一覧表」(富澤一弘「近代日本に於ける蚕糸業発展の軌跡—統計資料の検討を中心にして」, 『高崎経済大学論集』第44巻第4号, 2002年, p.60)をもとに作成。
- 32 - 「商品別・国別貿易構成」(長岡新吉・田中修・西川博史『近代日本経済史』, 日本経済評論社, 1980年, p.82-83)。
- 33 - 「アメリカにおける絹織物業の発展」(杉山伸也「国際環境と外国貿易」, 梅村又次・山元有造編『開港と維新』, 岩波書店, 1989年, p.207)。

【主な参考資料・文献】

- ・有泉貞夫「県令藤村紫朗と近代山梨」, 山梨県教育庁学術文化課『山梨県史研究』創刊号, 1993年。
- ・有泉貞夫編著『山梨県の百年』, 山川出版社, 2003年。
- ・飯田文弥・秋山敬・笹本正治・斎藤康彦『山梨県の歴史』, 山川出版社, 1999年。
- ・石和町町誌編さん委員会編『石和町誌 第一巻 自然編歴史編』, 石和町発行, 1987年。
- ・磯貝正義・飯田文弥『山梨県の歴史』, 山川出版社, 1973年。
- ・磯貝正義編『図説山梨県の歴史』, 河出書房新社, 1990年。
- ・梅村又次・山元有造編『開港と維新』, 岩波書店, 1989年。
- ・榎本守恵・君尹彦『北海道の歴史』, 山川出版社, 1975年。
- ・河西秀夫「山梨県の明治期の水害とその社会的影響」, 山梨学院大学社会科学研究所『社会科学研究』第26号, 2001年。
- ・小畑茂雄「明治四十年の大水害被災者の北海道移住について」, 『山梨県立博物館研究紀要』第2集, 2008年。
- ・甲府市市史編さん委員会編『甲府市史 別編Ⅲ』, 甲府市役所, 1993年。
- ・斎藤康彦『産業の展開と地域編成』, 多賀出版, 1998年。
- ・斎藤康彦『産業近代化と民衆の生活基盤』, 岩田書院, 2005年。
- ・佐藤森三・上野晴朗・飯田文弥『山梨の百年』, NHKサービスセンター甲府支所, 1968年。
- ・新・豊浦町史編纂委員会編『新・豊浦町史』, 豊浦町発行, 2004年。
- ・新保博・斎藤修編『近代成長の胎動』, 岩波書店, 1989年。
- ・富澤一弘「近代日本に於ける蚕糸業発展の軌跡—統計資料の検討を中心にして」, 『高崎経済大学論集』第44巻第4号, 2002年。
- ・長岡新吉編著『近代日本の経済—統計と概説』, ミネルヴァ書房, 1988年。
- ・長岡新吉・田中修・西川博史『近代日本経済史』, 日本経済評論社, 1980年。
- ・西川俊作・阿部武司編『産業化の時代 上』, 岩波書店, 1990年。
- ・橋本寿朗・大杉由香『近代日本経済史』, 岩波書店, 2000年。
- ・早川文太郎・須田宇十『山梨県水害史』, 山梨県水害史発行所, 1911年。
- ・笛吹市教育委員会文化財課「100年の災害の記録を未来へ—笛吹市風水害誌発刊記念写真展リーフレット」, 2007年。
- ・笛吹市風水害誌編集委員会監修『笛吹市風水害誌』, 山梨県笛吹市発行, 2007年。
- ・藤岡謙二郎『日本の地名』, 講談社, 1974年。
- ・山梨県立博物館「Review 水害—解説1~3」(リーフレット)。
- ・山梨県立博物館『「米キタ」『アスヤル』—明治四十年の大水害から百年』, 山梨県立博物館発行, 2007年。
- ・渡辺茂編『豊浦町史』, 豊浦町発行, 1972年。
- ・山梨郷土研究会編『山梨の歴史景観』, 山梨日日新聞社出版局, 1999年。
- ・山梨県教育委員会『ふるさと山梨 中学校版』, 山梨県教育委員会発行, 2008年。
- ・山梨県編『山梨県史資料編 14』, 山梨県発行, 1996年。
- ・山梨県編『山梨県史資料編 16』, 山梨県発行, 1998年。
- ・山梨県編『山梨県史通史編 5』, 山梨県発行, 2005年。
- ・山梨県編『山梨県史民俗編』, 山梨県発行, 2003年。
- ・山梨県北都留郡誌編纂会編『北都留郡誌』, 名著出版, 1973年。
- ・山梨治水研究会「かわ navi 笛吹川 明治40年大水害100年記念」, 山梨治水研究会発行, 2007年。

V 結び—特質・意義—

小单元「北海道の『山梨』」の特質・意義は、次の三点にまとめられる。

第一の特質・意義は、学習者が歴史授業において、既存のものの見方考え方という既に自らの頭の中にもっている枠組を社会的なものの見方考え方に改めつつ対象に取り組む認識づくりによって社会をわかることである。この小单元は、教師の指導のもとに学習者が見方考え方の変形・拡大による認識づくりを反復的に繰り返かえし、それによって学習内容である歴史社会認識へと段階的に迫っていくとともに新たな見方考え方を自らの中にうみだすことができる歴史授業である。学習者の認識づくりによる歴史授業としては他のアプローチも考えられる。例えば、学習者が相互の相異なった見方考え方に基づく解釈との関係において、自らの見方考え方や解釈を省みたり共同して新たにつくりだしたりすることに重点をおく討論型の授業なども考えられる。それらは学習者が社会をわかる作用を学習の基軸にすることで共通する。学習者の頭の中と授業を結びつけたものにし、社会的な見方考え方とともに歴史社会を学べるようにすることが重要であり、その一つの可能性を小单元「北海道の『山梨』」は具体的に示していよう。

第二の特質・意義は、学習者が地域の歴史事象について掘り下げていくことにより、地域レベルの社会とともに国レベルや世界レベルの社会をわかること、それらを関連づけて相対化してわかることである。小单元「北海道の『山梨』」は、地域史の取り扱いを地域史の学習で終わらせないし、日本史の学習の単なる動機づけや具体例の参照に留めることもしない。社会科の歴史授業として、地域史を取りあげるときにも当時の様々なレベルの社会を捉えられるようにする。それは地域社会認識・日本社会認識・国際社会認識づくりとしての地域史学習であり、現在の多様な社会を捉えるうえで有意義な認識を学ばせるものとなっていよう。

第三の特質・意義は、様々な物事を学習者が一旦つきはなして見てみよう意識できることである。この小单元は、学習者が「身近な地域の歴史」をもの見方考え方を改めつつ解釈し、地名をはじめとする様々な物事に社会性を読むことにより、自然現象のようなものと見てしまわずに社会現象として見つめなおしてみることの面白さや大切さを実感できるものである。当たり前と自明視せず一度疑問の眼を向けてみようとする事、社会の在り様を見出してみようとする事や新たな在り方を考えてみようとする事は、社会の形成に向けた一歩にとって重要である。そのような態勢づくりを社会の認識づくりや判断づくりの学習を通じて促すことは社会科の授業において必要であろう¹³。

¹³ 戸田善治研究代表『子どものポピュラー文化に関する教材開発研究』（平成18年度文教協会研究助成金研究成果報告書）、2007年、参照。